



<書評>Celso Furtado: Formacao Economica do Brasil

西向, 嘉昭

(Citation)

国民経済雑誌, 108(4):117-123

(Issue Date)

1963-10

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/00167970>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00167970>



Celso Furtado: Formação Econômica do Brasil

Editôra Fundo de Cultura, Rio de Janeiro, 1959, 291p.

西 向 嘉 昭

I

著者はブラジルの代表的な経済学者であり、ロベルト・カンポス (Roberto Campos) とならんでその業績は国際的に注目を集めている。1944年にブラジル大学を卒業し、パリ大学で学位を得たのちケンブリッジ大学へ研究員として留学した。1949年から国連ラテン・アメリカ経済委員会 (ECLA) の一員として、ブラジル、メキシコおよびベネズエラの経済開発に関する専門研究を主宰した。この間に ECLA, 米州機構 (OAS) および UNESCO などの主催する多くの国際経済会議に参加している。その後ブラジル経済開発銀行 (BNDE) やノルデステ経済開発庁の首長を歴任し、地域開発問題にとりくみ、現在は経済計画担当の国務大臣として敏腕をふるい、本年から実施されている経済開発3カ年計画はフルタード計画とも呼ばれ、その成果が期待されている。

本書は著者の代表的な労作の一つである。ブラジル経済はもとより多くの低開発諸国の経済に関する著作が最近しだいに多くなってきたが、それらのうちには低開発経済の現実を解釈するに際して、先進国における異なった必要性に応えるために創出された種々のモデルを利用しているものが少なくない。これに対してフルタードの本書はきわめてオリジナルな概念および厳密な方法論に基づいている。まずかれは発展現象を適切な歴史的展望の中において捉えている。これは発展現象を一定の社会経済的脈絡の機能において解釈することを可能ならしめ、ある段階からつぎの段階への移行の継続性を説明する規準をあたえている。フルタードの分析方法の他の特徴は、ブラジル経済の形成過程を全体的および巨視的視点に立って分析している点であり、それによって本質的な要因と表面的な要因を適切に区別することに成功している。読者はそこにブラジルの経済

1 フルタードの代表的な著作はつぎの通りであるが、このほか多くの論文を発表している。

A Economia Brasileira, Rio de Janeiro, 1954.

Uma Economia Dependente, Rio de Janeiro, 1956.

Perspectivas da Economia Brasileira, Rio de Janeiro, 1958.

A Operação Nordeste, Rio de Janeiro, 1959.

Desenvolvimento e Subdesenvolvimento, Rio de Janeiro, 1961.

発展の経路や形態を規定した基本的な諸関係を見出すことができる。要言すれば、かれの分析方法は社会組織の歴史的相関性および発展の決定的な重要性をそこに作用する諸要因の本質を示す理論的モデルに基づいて明らかにすることである。しかしその反面には部分的ではあるが過度に図解的な説明におちいる傾向があり、単純化の危険にさらされている。けれどもブラジル経済の研究者が付帯的ないし重要性の乏しい歴史的事実にまどわされることなく、経済発展の本質に接近し得る意味において、本書の意義は高く評価されるべきである。

著者はまずブラジルの植民地農業成立の経済的基盤とその変化を国際経済史との関連において明らかにしたのち、ブラジルの経済形成の歴史をつぎの四つの段階に分けている。すなわち、熱帯農業の奴隷制経済、鉱業の奴隷制経済、奴隷労働から賃銀労働への過渡的経済および産業体制への過渡的経済がそれである。

I

初期のブラジル植民地において確立した砂糖生産に基づく熱帯農業経済は、明らかにポルトガルの植民地支配の経済的基盤であったし、またこれはブラジル植民地を本国経済さらにはヨーロッパの先進諸国の経済に統合せしめるものであった。この時期においては、投資はもっぱら奴隷労働に基づく砂糖生産の拡大に向けられ、それがブラジル経済の特徴を構成し、さらにその後の経済の方向を規定した。つまり、奴隷制生産組織においては貨幣の流れの波及範囲は著しく限定される。プランテーション内部においては、奴隷は単に輸出品の生産に従事するだけでなく、そこでかれらの消費する食料の大部分の生産や、製糖工場およびその他の必要な建設作業にも従事せしめられた。したがって、ブラジル経済に生じた動態的衝撃は、機械設備の置換えや農園主ならびに商人階級の消費を通じてほとんど完全に外部にトランスファーされることになる。貯蓄は依然として砂糖生産に投資されるかまたは外部に向けられた。国内市場が欠如していたため、それを新たな生産活動に向かわしめる誘因が存在しなかったのである。

国内の所得の流れが小さかったことが、長期間にわたってブラジル経済の構造的変化を妨げた。好況期においては、豊富な土地の存在と貨幣所得の過度の集中が地主をして生産能力を大いに拡大せしめ、反対に不況期において砂糖の国際価格が著しく下落した場合でも、生産水準をかなり高く維持することができた。なぜなら、砂糖の生産費のほとんどが固定費用から成っていたからである。不況が長期にわたったときには、生産設備の置換えが十分行なわれないことから生産能力が減少する傾向があり、そして若干の生産要素が輸出部門から自給経済部門へ転換される傾向があった。

III

ポルトガルがスペインに吸収され、オランダ人がブラジルの砂糖地帯を占領するに至って、砂糖生産は重大な危機にさらされた。オランダ人は後に放逐することができたけれども、製糖技術はアンチル諸島にもたらされたので、この分野におけるブラジルの独占的地位は崩壊した。

ポルトガルの経済的解体と結びついた砂糖市場の危機は、ブラジル経済を停滞から脱出せしめる必要性を強めた。金鉱の発見はブラジルの経済的回復を可能ならしめ、そして異なった基盤に基づいた新しい発展段階が始まる手がかりをあたえた。鉱業経済の出現は、従来の砂糖経済とは異なり、国内市場と結合した生産活動の可能性をもたらした。なぜなら、平均所得水準は砂糖生産の好況期よりも低かったけれども、所得分配はより平等化され、所得の流れも相対的により大きく、他方で輸入性向も従来に比して減少したからである。それにもかかわらず、ブラジルにおいては国内市場に支えられた工業生産がおこるに至らなかった。その原因は従来ポルトガルの植民地政策に求められてきたが、²フルタードはそれが大きな影響をあたえたとは考えない。なぜなら、それ以前の繁栄期においてもまた鉱業経済の衰退期においても、ブラジルにおける工業の発展はほとんど皆無に等しかったからである。著者によれば、その基本的原因は移住者の技術的無能に求められ、それがかなりの規模で工業活動を始めることを困難にしたという。ポルトガル人の工業技術の欠如は、ポルトガルがスペインの侵略をうけたのちイギリスと締結を余儀なくされたメスエン条約に基因する。この条約はイギリスの潜在的植民地としてのポルトガルの存立は保証したが、他方においてポルトガルの工業の発展を著しく阻害した。明らかに本条約の履行を可能ならしめたのは、ブラジルの金が製造品の必要を満たすに十分な輸入能力をポルトガルにあたえたからであった。

18世紀の後半から金の生産が減少し、ブラジル経済は再び衰退の途をたどることになる。砂糖経済の場合には生産水準をある程度まで維持して利益をあげることができたが、鉱業経済においてはそれは不可能であり、金の減産はますます自給経済部門への生産要素の移動を刺激した。そして奴隷制の存在と工業部門の欠如とが、さもなくば生じる重大な社会的緊迫をひきおこすことなしに、この過程の進行を容易ならしめたのである。

IV

ブラジルが独立した19世紀前半は外国貿易が不振で、所得水準は減少しつつあった。1808年来の自由貿易およびその後のイギリスに対する関税譲歩により、財政収入は減少

2 1785年の法律によって、ポルトガルはブラジルにおけるすべての製造工業の設立を禁止した。

した。つまり輸入関税はブラジル政府の主たる財源であり、それに代わる輸出関税は大地主階級の強い抵抗を受けたからであり、それが通貨増発や政治不安をひきおこした。

しかし、イギリスとの不利な経済関係がこの段階におけるブラジルの工業化を妨げ、政府が保護手段を採ることを不可能にしたという一般的な見解に対して、著者は疑問をなげかけている。そしてその疑問を、なぜアメリカは19世紀において工業化され、なぜブラジルは20世紀においてなお低開発地域にとどまっているのかという問題提起を通じて明らかにしている。フルタードは両国の独立期における基本的な差異を、前者においては支配階級が小農民および商人であったのに対し後者では大地主階級であったことに求める。18世紀末および19世紀前半のアメリカの経済発展はヨーロッパ経済の発展の一部であり、国内産業の保護手段によるところは少ない。受動的な関税保護よりもむしろ積極的な育成手段に負うところが大きかった。これに反して大地主階級に支配されていたブラジル政府は、工業の積極的な育成を行わず、さらに他方で奴隷制が存続していたために国際資本市場に頼る可能性も乏しかったという。かくして19世紀前半のブラジル経済においては、工業化を開始する諸条件はととのっておらず、それゆえ新しい繁栄の段階に達するためには、輸出の拡大が唯一の方策であった。

このような条件のもとにおいて、コーヒー栽培がしだいに重要性をもつようになり、その輸出がブラジル経済に新たな繁栄をもたらすに至った。これにはつぎのような諸要因が作用した。まず1790年代からコーヒー価格が上昇し、他方において鉱業経済の衰退の結果、初期のコーヒー栽培地域には労働力が相対的に豊富であり、また積出港への輸送が有利であった。つまりコーヒー栽培の初期の拡大は既存の不完全利用の資源の集約的利用に基づいて行なわれた。そのために、その後のコーヒー価格の下落もブラジルの生産者には著しい影響をあたえず、輸出量は急速に増大した。コーヒー生産の拡大過程は砂糖生産と比較するとさらに容易に理解される。両者とも奴隷労働の集約的利用に基づいた点では類似しているが、コーヒーの場合には土地利用に依存するところが大きく、固定資本は砂糖生産に比してはるかに少なかった。土地はたしかに資本を固定させるけれども、その置換えの貨幣費用は少なかった。奴隷労働を基盤にして組織されたコーヒー生産ではその拡大を妨げるのは労働費用の著しい上昇だけであった。初期段階では労働力が相対的に豊富であったから、価格が下落しても生産は拡大しつづけたのである。しかしやがて労働不足が重大な問題となり、ヨーロッパ移民を通じての自由労働者の獲得が求められ、さらにそれを妨げた奴隷制の廃止が行なわれるに至る。

賃銀労働に基づくコーヒー経済は、ブラジルの経済問題の諸条件を基本的に変化させるようになる。その一つはコーヒー生産をめぐって新しい支配階級が成長したことである。従来の砂糖経済における支配階級の形成過程においては、商業活動はポルトガル

の商人階級の手独占されていた。生産活動と商業活動は全く孤立し、生産者は砂糖経済の全般的な見通しを欠いていた。独立後もこの特質は本質的には同じであり、そのためにイギリス企業がノルデステの砂糖経済を完全に支配するに至ったのである。これに反してコーヒー経済においては、最初から生産と商業は密接に関係していた。新しい支配階級は、土地や労働の獲得、生産組織や方針の決定、国内輸送、輸出業務、対政府関係業務および財政金融政策への干渉など、広汎な分野にわたる競争を通じて形成されてきた。それゆえかれらの政治力はきわめて大きく、それがやがて連邦制につながる。

しかしさらに重要な変化は、所得循環に関するものである。コーヒー生産者が外部から受ける衝撃は、賃銀・俸給その他の生産要素に対する支払いを構成し、それが国内市場の形成を通じて多くの生産活動や商業活動の可能性をあたえるようになる。他方において、コーヒー生産の拡大に伴ってかつて生産性の低い自給経済部門に吸収されていた生産要素が再び輸出経済部門に吸収される過程が始まり、それゆえ貨幣経済が漸進的に滲透し、国内市場が拡大されるようになる。さらに国内需要の増大は、従来欠けていた経済の安定性をもたらすに至る。なぜなら、賃銀に支えられた有効需要は、経済の不況期の縮小に対する非伸縮性をもつからである。しかし、雇用と国内生産のより大なる安定性は他方において国際収支の不均衡への傾向をもたらした。国内雇用水準の維持または国内生産の増大から生じる輸入需要の増大が、国際収支に著しい圧迫をもたらし、それはとくに輸入能力が減少したりあるいはその増加率が輸入需要の増加率を下回る場合に顕著であった。

一般に原材料輸出国は、相対的により大なる利益が得られる輸出品生産に投資を集中する傾向がある。土地と労働が豊富であったコーヒー経済においては、それが生産の拡大を有利にしたが、他方において資本集約的な技術の導入を不経済にしたので、物理的生産性は著しく減少するようになる。一見すると輸出部門の変動は、先進国の需要の変動の函数であったと考えられるが、著者によればブラジルの場合にはこれは部分的のみ妥当するとされる。すなわち、コーヒー経済の景気上昇期においては、大地主階級は国際価格の上昇から得られる経済的生産性の利益を集中し、逆に不況期においてはその損失を為替相場の切下げを通じて社会的に転嫁する傾向があった。このような現象は、明らかに支配階級が自己の利益を防衛するために採った政策の直接的反映であったが、他方においてそれは不況期において経済の動的部門を支えることを可能ならしめ、輸出品生産の停滞の場合に生じるような極端な経済の衰退を回避せしめた。フルタードは、第一次生産物の輸出経済においてある程度までは不可避免的な社会的犠牲を表わすところのこの所得再分配過程を、ブラジル経済における重要な特質の一つと考えている。

それゆえ、このような条件のもとでは、コーヒー生産が外部需要の函数としてではな

く、土地および労力の入手可能性に基づいて発展したのはむしろ当然であった。

V

ところが前世紀末期に至って、コーヒー経済の危機はもはや従来の為替メカニズムを通じて解決され得なくなり、新たな方策が採られるようになった。すなわちコーヒーの供給調整を通じての価格維持政策がそれである。これによってコーヒー価格と生産を高水準に維持することができたが、しかしそれ自体では新しい投資機会を創造するのに不十分であったため、コーヒー生産はますます拡大する傾向があった。つまりこの政策はコーヒー問題の根本的な解決ではなく、それを将来にひきのばしたにすぎなかった。

1930年代の危機は、ブラジル経済にきわめて重大な打撃をあたえた。単なる余剰コーヒーの買上げによる供給調整だけではこの危機を脱することができず、ここにコーヒーの焼却が行なわれることとなる。この余剰コーヒーの買上げと焼却によるコーヒー保護政策は——それは従来は外国貸付金に基づいていたが、30年代には単に支払手段の拡張を通じて行なわれたものであった——意識的にせよ無意識的にせよ雇用水準の維持を可能ならしめ、不況の波及を相対的に緩和する有効な景気対抗策の中心を構成し、ブラジル経済の急速な回復だけでなく、輸入代替過程の進行に有利な国内市場条件をもたらした。すなわち、一方における輸入能力の著しい低下と、他方における高水準の需要の存在が、ブラジル経済の対外的脆弱性を漸次解消せしめる広汎な工業化過程を有利にしたわけである。他方においてコーヒー経済の保護政策は国際収支の不均衡を加重する一因となり、それを是正するための為替相場の切下げが輸入品価格を上昇せしめ、国内産業にさらに有利な条件を創り出した。

このようにして輸入代替過程が進行してくると、為替相場の変動が重大な影響をもつようになり、従来の輸出部門のみを重要視して対外不均衡の調整を為替相場の機能によってのみ解決するという方策が困難になってくる。第二次大戦の勃発とともに輸入が著しく減少し、国際収支の黒字が累積したにもかかわらず、為替相場が従来水準に固定され、クルゼイロ貨の過小評価が行なわれるに至ったのはこのためであった。その結果、輸出を通じての貨幣的需要の増大が国内産業を刺激し、他方において30年代からすでに顕著になっていたインフレを急速に昂進せしめることとなった。戦後は輸入の増大が著しく、国際収支はたちまち逆調に転じたがその対策として為替相場の切下げを行わずに輸入の選択統制が導入された。これは工業化に決定的に有利な条件をあたえることになった。つまり、国内産業は一方において物価が騰貴しているにもかかわらず他方で原材料や機械設備を低価格で獲得することができ、同時に外国競争品が国内市場から排除されるという二重の利益を享受することができたからである。

フルタードはブラジル経済の形成過程の説明を終えるにあたって、今後数十年間の経済発展の展望を行なっている。著者は今世紀の第三・四半期におけるブラジル経済の最も重要な構造変化は、輸出部門への投資の重要性が相対的に減少することであろうと述べているほか、最近とくに重要となってきた地域問題に言及し、もし所得水準の著しい地域格差を除去してブラジルの経済統合を達成せんとするならば、全体的なビジョンのもとで資源のよりよき利用に到達することが必要だと指摘している。しかしながら、この部分はきわめて概略的であり、ブラジル経済の歴史的経験と現在の諸条件に基づいて将来の経済発展を方向づけるべき経済政策に対するより具体的な言及がなされていないことが惜しまれる。

Ⅶ

本書は最近のブラジルの具体的な経済問題には言及していないが、基本的な問題意識について著者自身のきわめてユニークな見解を示している。ブラジル経済の形成過程に関する著者の独自の見解はすでに紹介したとおりであるが、最近の経済問題としては地域開発に関してとくにすぐれた見解を述べている。その他の諸問題で本書において十分に論述されなかったものについては、別著においてそれを補ない、なかでも戦後の輸入選択統制の導入を契機とする産業資本家への経済的主導権の移行や、発展に対するインフレの効果に関する分析は併読すべきものである³。

要するに本書はブラジル経済の発展問題を先入観や旧襲主義をはなれてより客観的に明らかにせんとする意図をもち、その多くの部分において成功をおさめている。著者は序文において本書がブラジル経済に関する入門書として書かれたものであると述べているが、決して単なるブラジル経済の概観書の域にとどまるものではない。不幸にしてわが国ではラテン・アメリカ経済に関する研究は未だにきわめて不十分であり、ブラジル経済についても例外ではない。ブラジルないしラテン・アメリカを低開発地域の単なる類型としてとりあげる段階はもはや克服されねばならない。この意味においても、ブラジルの代表的な経済学者たる著者がその独自の理論的立場でブラジル経済の内側から考察した本書は、きわめて意義のあるものと言わねばならない。そして本書はブラジル経済の研究者に対してだけでなく、ラテン・アメリカ経済の研究者に対しても多くの価値ある示唆をあたえるであろう。幸い本書は今年英語版が刊行された⁴。ラテン・アメリカ研究の障害の一つを構成していた言語の問題もしいに克服されつつあるのである。

3 Idem, *Desenvolvimento e Subdesenvolvimento*, Rio de Janeiro, 1961, cap. 6.

4 Celso Furtado, *Economic Growth of Brazil; A survey from colonial to modern times*, University of California Press, Berkley · Los Angeles, 1963.